

学 位 名	博士（臨床心理学）	研 究 科 攻 専	心理学研究科
学 籍 番 号	—	氏 名	中里 克治
学 位 論 文 題 目	成人初期から高齢期に至る不安とその測定		
審 査 の 結 果	合格 ・ 不合格		
学 位 授 与 年 月 日	平成 27 年 3 月 19 日		
審 査 委 員 会	【審査委員長】 太田 信夫 教授 【審査委員】 鶴 光代 教授 【審査委員】 近藤 清美 教授		

《論文審査の結果の要旨》

本論文の構成は5つの章から成っている。第1章は、「不安の時代 20 世紀」第2章は「痛みと不安」、第3章は「状態不安と特性不安の測定」、第4章は「状態不安と特性不安の成人期での特徴」、第5章は「不安の時代から鬱の時代へ」である。

1章では、20世紀におけるうつ病、神経症、認知症などの基底にある不安の問題を取り上げ、現代社会に潜む病巣について、多くの先行研究を引用しながら鋭く論じている。2章では、がん患者における不安と痛みとの関係を実験的に検討し、いくつかの新しい知見を見出している。3章では、不安を状態不安と特性不安とに区別した上で、この2種の不安を同時に測定するための「日本版 STAI 状態・特性不安検査」を作成し、信頼性、妥当性を検討し確認している。今日、本検査は、不安を測る確かな方法として大変多く利用されており、その作成の功績は大きい。4章では、この検査を約1200人の成人初期から高齢者まで実施し、高齢期には不安水準が最も低くなることや、男性より女性の方が不安が高くなることなど、学術的に貴重なデータをいくつか示している。また生涯発達の視点から不安と社会的要因との関連についても調査・考察し、明らかにしている。このような結果は、高齢者理解に関する新たな視点をもたらしており、本研究のオリジナリティの高さを表すものである。5章では、20世紀の不安の時代から今日では鬱の時代に変わりつつあるけれども、状態不安と特性不安を区別して測定できる STAI の役割は生きていと論じている。

以上、本論文は、多くの学術的に貴重な実証とすぐれた考察から成っており、臨床心理学的に高く評価でき、博士（臨床心理学）論文として十分に値すると判断した。